

## 共立女子大学博物館収蔵品の修復報告Ⅰ－白木綿地立木草花模様更紗について－

田中淑江、高橋由子

### 1. はじめに

2019 年秋に開催の展覧会「和と洋が会える博物館共立女子大学コレクション 6」で展示されていた「白木綿地立木草花模様更紗」は<sup>1)</sup>、作品の模様を分断するように縦横中央に深い折り皺が顕著に見られ、全体に細かな折り皺が生じ、作品の美観を損ねていた（図 1）。そのため、初めての試みとして博物館と家政学部被服学科被服平面造形研究室が連携し、博物館コレクション「白木綿地立木草花模様更紗」の展示・保存のために修復を行うこととなった。本研究室は旧被服研究室の流れを汲み、染織文化財の修復を研究対象の一つの軸として取り組んでいる。旧研究室で培われた長年の知識と技術を生かし<sup>2)</sup>、近年の修復技術や知識、最新の修復素材を用いて、博物館・美術館から委託される様々な染織文化財の修復に携わっている<sup>3)</sup>。

本報告では共立女子大学博物館収蔵品である「白木綿地立木草花模様更紗」の修復について述べる。

### 2. 作品について

#### 2－1. 作品概要

##### 1) 作品の模様と技法について

本作品は 17－18 世紀制作のインド更紗に分類されている。作品の中心には立木の草花模様が手描きされている。このような様式の模様を「生命の樹」として分類し、草花以外に果樹、花樹などが連続模様として表現される。「生命の樹」は宇宙の表象であり、豊穡と繁栄と濃い服を象徴している。また天界と地界を繋ぐ存在である<sup>4)</sup>。

また、上部に施されたアーチはイスラムのミフラーブを表現している。ミフラーブとはイスラム礼拝堂モスクにおいて、礼拝室の最奥の壁に設けられた一種の壁龕のことである。聖地メッカの方向に面した壁に設けられ礼拝の目印となる<sup>5)</sup>。さらに作品中心の模様の周りを囲うボーダー部分には、白抜きの型染めによる花唐草模様が配置される。このように、生命の樹、花唐草などが配置される模様形式はイスラム好みとされている<sup>6)</sup>。

##### 2) 素材

表地、裏地とも木綿が使用されている。表地の織密度は経 30 本/cm、緯 31 本/cm、裏地の織密度は経 14 本/cm、緯 16 本/cm である（図 3）。表地の木綿は裏地に比べ繊維が細く均一であるが、裏地の繊維は太さが均一でなく、荒い質感である。また裏地は 7 枚剥ぎで仕立てられている（次ページ図 6 参照）。裏地に以前の所蔵先の管理番号であろうか「37」の数字の記載が見られる（図 4）。

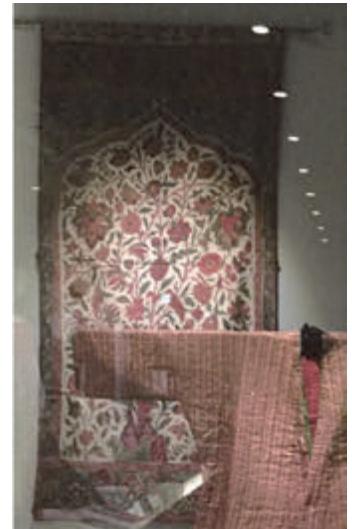


図 1 展示されている様子



図 2 修復後の作品の様子（表）

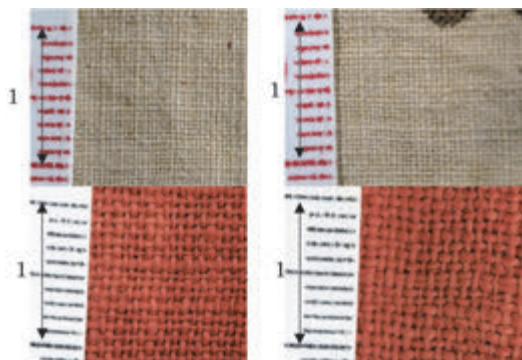


図 3 糸密度（左上：表地経糸、右上：表地緯糸、左下：裏地経糸、右下：裏地緯糸）



図 4 裏地に見られた番号

### 3) 寸法

以下、図5に修復前、修復後の寸法を示す。また、裏地の剥ぎ位置については図6に示す。

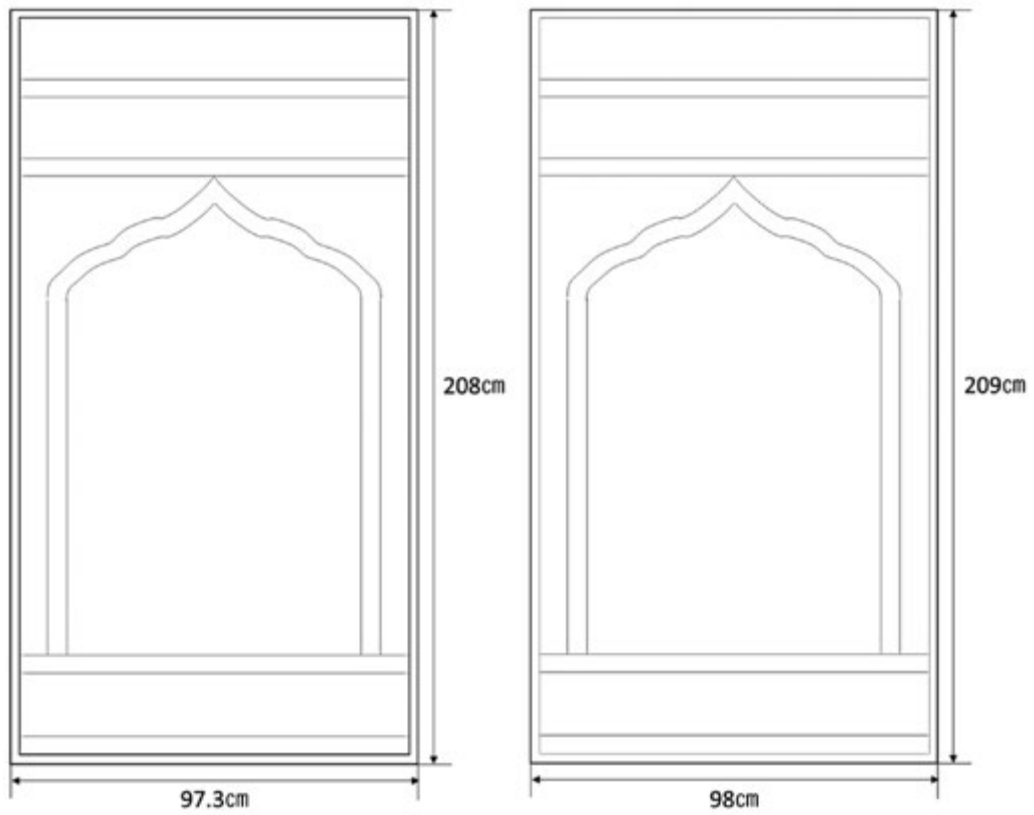


図5 寸法図（左：修復前、右：修復後）

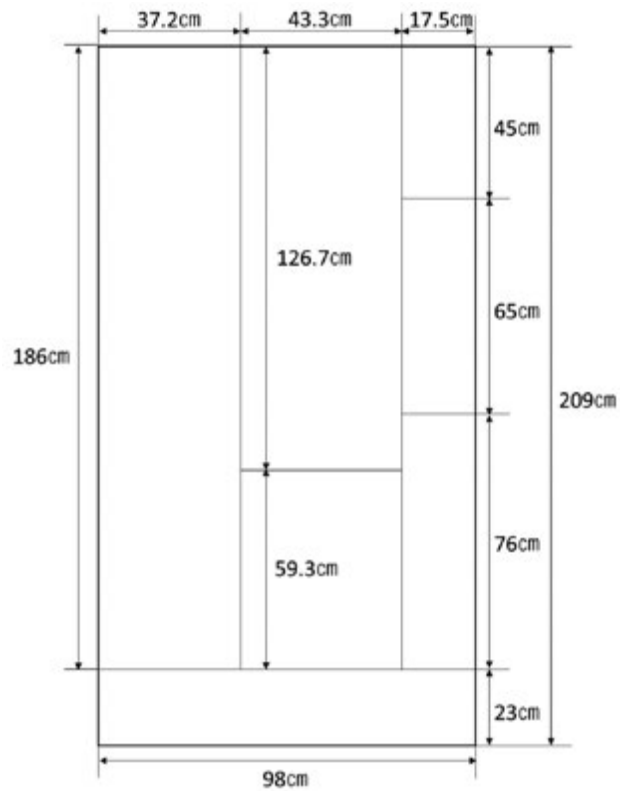


図6 裏地剥ぎ位置

## 2-2. 損傷状態について

本作品は、模様の一部が欠損し、その部分はすでに修復が施されていた。図7は欠損部分の繊維が何らかの接着剤で固定されている。また図8は、欠損部分を裏側から他の生地で補い、表地には不釣り合いな色糸で留めつけが行われていた。今回の修復ではこれらの箇所は現状のままとし、新たな修復は行わないこととした。

他の損傷箇所として、本作品は保管の関係から、長期間にわたり折り畳み保存されていたため、作品縦横中央に深い折皺、全体に細かな折皺が生じていた。この皺はこのままの状態を放置すると、折り皺部分の糸の切断が生じ、経・緯に切れが生じ、損傷を拡大させる可能性がある。更に作品の縁を施す、ステッチの糸がほつれた不安定な状態であった。

以下作品の損傷箇所を一覧にまとめ、図示する。

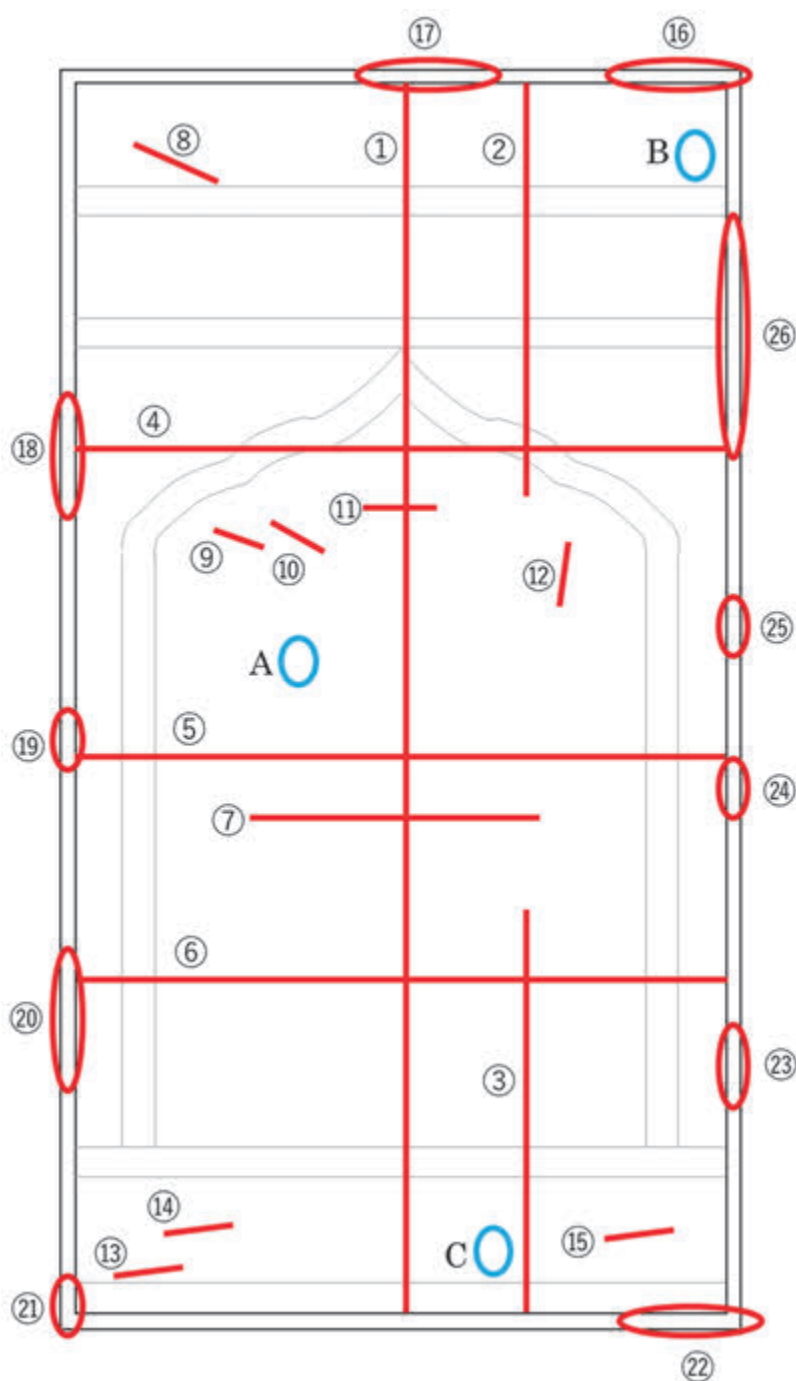


図9 損傷地図



図7 接着剤の様子  
(後補A)

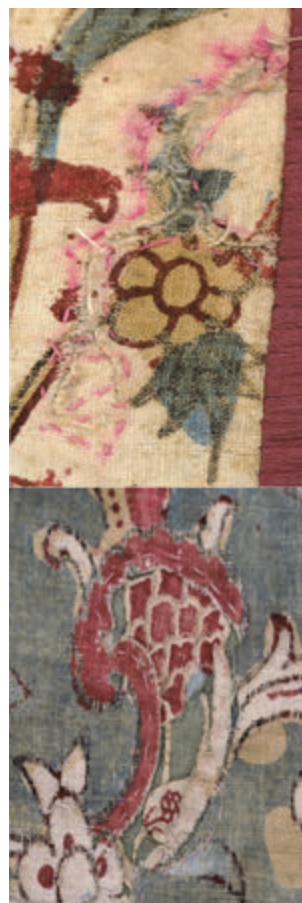


図8 色糸での留めつけの様子  
(上：後補B、下：後補C)

表1 損傷箇所一覧

No	主な損傷	備考
①	縦方向全体に大きなしわ	大きな縦のしわ
②	辺 AD から 20 cm の位置に上端から 53 cm の位置まで縦方向に大きなしわ	大きな縦のしわ
③	辺 AD から 24 cm の位置に下端から 50 cm の位置まで縦方向に大きなしわ	大きな縦のしわ
④	辺 AB から 52 cm の位置に横方向の大きなしわ	大きな横のしわ
⑤	辺 AB から 104 cm の位置に横方向の大きなしわ	大きな横のしわ
⑥	辺 AB から 154 cm の位置に横方向の大きなしわ	大きな横のしわ
⑦	⑤の下、横方向に 75 cm の大きなしわ	大きな横のしわ
⑧	辺 AB から 13 cm の位置に 11 cm のしわ	細かいしわ
⑨	辺 AB から 77 cm の位置に横斜め方向に 11 cm のしわ	細かいしわ
⑩	辺 AB から 77 cm の位置に横斜め方向に 13 cm のしわ	細かいしわ
⑪	④の下、横方向に 5 cm のしわ	細かいしわ
⑫	辺 AB から 87 cm の位置に縦方向に 7 cm のしわ	細かいしわ
⑬	辺 CD から 6 cm の位置に横方向に 10 cm のしわ	細かいしわ
⑭	⑬のすぐ上、横方向に 10 cm のしわ	細かいしわ
⑮	辺 CD から 15.5 cm の位置に横方向に 5 cm のしわ	細かいしわ
⑯	角 A、角 A から 8 cm、16 cm の位置にふちの損傷	ふちの損傷
⑰	角 B から 29 cm の位置に 30 cm のふちの損傷	ふちの損傷
⑱	角 B から 48 cm、53 cm の位置にふちの損傷	ふちの損傷
⑲	角 B から 101 cm の位置に 5 cm のふちの損傷	ふちの損傷
㉑	角 B から 133 cm の位置に 27 cm のふちの損傷	ふちの損傷
㉒	角 C から 2 cm の位置に 5 cm のふちの損傷	ふちの損傷
㉓	角 D、角 D から 8 cm、16 cm の位置に 2 cm のふちの損傷	ふちの損傷
㉔	角 A から 147 cm の位置に 3 cm、159 cm の位置に 2 cm、183 cm の位置に 6 cm のふちの損傷	ふちの損傷
㉕	角 A から 139 cm の位置に 3 cm のふちの損傷	ふちの損傷
㉖	角 A から 100 cm の位置に 4 cm のふちの損傷	ふちの損傷
㉗	角 A から 19 cm の位置から 30 cm のふちの損傷	ふちの損傷



### 3. 修復方法について

#### 3-1. 修復技法

本作品は前項に述べた通り、折り畳み皺を中心とした損傷が全面に見られる。それらの皺を平らにするために加湿処置を行うこととした。加湿処置とは、作品にゆっくりと湿気を与え、繊維自体がしっかりと湿気を含んだ状態になるように加湿し、作品の折れや燃れ部分に重しを置き、時間をかけて平らな状態に整形する方法のことである。なお、この方法は作品に直接水分を与えるのではなく、作品を透湿防水性素材で覆い<sup>7)</sup>、間接的に水蒸気により作品に湿気を与える（図10）。熱を加えず時間をかけてしわを伸ばすため、作品への影響が少ない方法である。

また作品の縁に施されたステッチのほつれは、糸が燃れたり、絡まったり、糸がばらばらになっていた。そのため、その個所の糸をできるだけ元の状態になるように丁寧に解し、糸の向きをそろえ整えた。次に糸を固定するために、糸に対して垂直に修復の糸を渡す、または作品の裏側で修復の糸でカウチングステッチなどで留めるなど、ほつれた糸を作品に固定する方法で修復を行った（次ページ図16～18参照）。

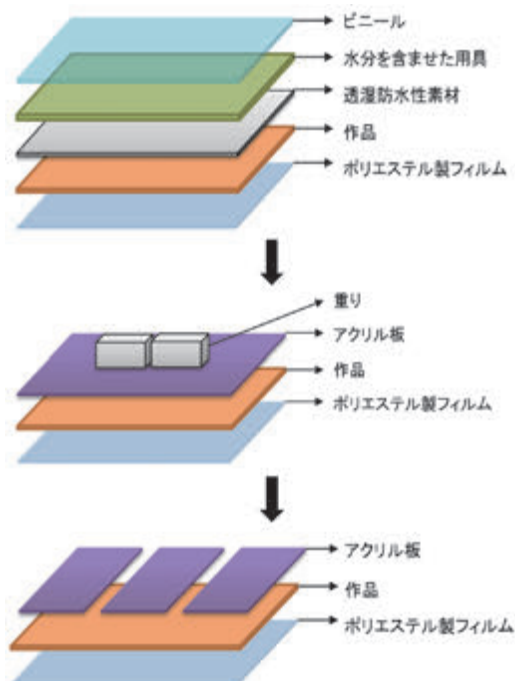


図10 加湿処置の工程図

#### 3-2. 修復工程

修復の工程について述べる。

##### 1) 修復前調査及び調書作成

修復を行う前に作品の損傷箇所調査を行い、調書を作成する。作品の寸法の計測や状態を観察し、記録のため写真撮影も行う。その結果を調書としてまとめる。

##### 2) 修復

調書を元に作品に適した修復方法を検討する。修復方法は作品の状態によって多岐にわたるが、今回は加湿処置と損傷箇所を糸でとめることにした。（図12～15）。損傷箇所を留める方法も様々な手法があるが、今回は作品の縁を同素材の糸を用いて留めることにした（次ページ図16～18）。



図11 修復前調査及び調書作成



図12 防水透湿性素材を用い湿気を加えている様子



図13 ビニールをかけて水分の蒸発を防ぎ加湿をしている様子（30分）



図14 重りを使用し、しわを伸ばしている様子（半日～1日）



図15 乾燥の様子（20分）



図16 糸を揃えている様子（右：手元の拡大）



図17 横に渡して縫い留めた状態（左：表、右：裏）



図18 縦に渡して縫い留めた状態（左：表、右：裏）

## 4. 結果

### 4-1. 修復結果

本作品は加湿処置法により全体に見られた折り皺はほぼ平らな状態となった。一部しわは浅くなったが、跡が残った箇所もある。また、歪んだ形状も整えられたことで、折り皺により模様が分断されていた箇所もなくなった。さらに作品の縁を施すステッチのほつれは固定され、安全に扱えるようになった。これらの修復結果から本作品は安全な取り扱いが可能となり、見栄えが良くなり展示効果を高めることが出来た。この修復の状態を保つために今後の保存方法を検討し、図19、20のような筒に巻取りロール状にすることとした。この方法は一般に、タペストリーなど平面で面積の大きい作品に用いる保存方法である<sup>8)</sup>。本作品は今後の展示・研究・教育・保存に有効な状態になったと考える。



図19 作品をロール状に包んだ状態



図20 作品を包んでいる様子

### 4-2. 修復前・修復後全体写真



図21 更紗全体写真（左：修復前 右：修復後）



4－3. 修復前・修復後詳細写真


ここでは表1に示した色番号の損傷箇所の修復前・修復後の様子を図示する。

表2 修復前・修復後詳細写真一覧

②縦方向の大きなしわ	
修復前	修復後
	
⑤横方向の大きなしわ	
修復前	
	
修復後	
	

⑦横方向のしわ	
修復前	修復後
	
⑧細かいしわ	
修復前	修復後
	
⑫縦方向の細かいしわ	
修復前	修復後
	
⑬横方向の細かいしわ	
修復前	修復後
	







⑭横方向の細かいしわ	
修復前	修復後
	
⑮横方向の細かいしわ	
修復前	修復後
	
⑯ふちの損傷	
修復前	修復後
	
⑰ふちの損傷	
修復前	修復後
	

⑱ ふちの損傷	
修復前	修復後
	
⑲ ふちの損傷	
修復前	修復後
	
⑳ ふちの損傷	
修復前	修復後
	
㉑ ふちの損傷	
修復前	修復後
	



②ふちの損傷	
修復前	
	
修復後	
	
③ふちの損傷	
修復前	
	
修復後	
	
④ふちの損傷	
修復前	修復後
	



㊸ふちの損傷	
修復前	修復後
	
㊹ふちの損傷	
修復前	修復後
	

## 5. おわりに

今回は博物館と連携し、作品を次世代へ継承するために安全な状態へと修復する初めての試みであった。今までの筆者の修復経験では、修復する際の作品状態は、損傷が著しく、安全に扱うことや展示することがかなり難しい作品が多かった。しかし、本作品は損傷はあるものの、その多くは美観を損ねる折皺など、致命的な損傷ではなく、このまま修復の手を加えないで時間を経ると損傷を引き起こす可能性がある状態であった。そのため今回、損傷の原因となる折り皺を取り除くことで、損傷拡大を未然に防ぐことのできる時期の修復であった。文化財は作品の価値を維持するためには出来るだけ手を加えないことが望ましい。そのため、本修復は作品の価値を維持するためにも、過度な手を加えず、修復を行い、作品を安全な状態に整えることが出来た。すなわち作品を修復するには最適な時期であったと考える。染織文化財の管理においては、可能な限り、著しい損傷状態になる前に、作品の状態を安全に整えることが望ましい。このように作品にとって最善な時期の修復は、博物館と修復活動が近くで連携しているからこそ可能になったことである。今後も本学のコレクションが教育のため、また地域社会の貢献を担えるように、保存修復の立場から連携していきたい。

## 謝辞

本修復にあたり、染織品修復技術者である大野慈枝様と中川はるか様のご協力に、心より感謝申し上げます。

## 参考文献

- 小笠原小枝「日本の美術更紗」至文堂、第175号、1980  
 岡村吉右衛門「染織の美 27 特集：インドの染織 / 世界の絁」京都書院、第27号、1984  
 吉本忍「ジャワ更紗 その多様な伝統の世界」平凡社、1994  
 小笠原小枝他「別冊太陽 更紗」平凡社、2005  
 岩立広子「岩立広子コレクション インド 大地の布」求龍堂、2007  
 佐藤留実「更紗いのちの華布」淡交社、2016  
 「ジャワ更紗」サントリー美術館、1987

「インドの服飾・染織展」文化服飾博物館、1988

「インドネシア更紗のすべて－伝統と融合の芸術」朝日新聞・町田市立美術館、2007

「古渡更紗」（特別展図録）五島美術館、2008

註

- 1) 「和と洋が会える博物館共立女子大学コレクション6」2019年10月9日～11月29日
- 2) 昭和30年代より山本らく、栗原弘、河村まち子ら歴代の教員は文化財の学術的調査・研究と、研究室が担ってきた和裁を中心とする伝統的染織技術を用いて染織品文化財の修復、復元（学術模造）に携わっていた。関係諸機関：東京国立博物館、仙台市博物館、徳川美術館、正倉院、法隆寺、厳島神社、鶴岡八幡宮、熱田神宮等
- 3) 2016年より現在も継続して五島美術館から文化財の保存のための収納袋の依頼を受けている。また2017年から大阪歴史博物館、静岡県立美術館、根津美術館、相撲博物館、さいたま市人形博物館、東京国立博物館、大倉集古館などから能装束や名物裂、化粧まわし、人形の衣装などの染織文化財の修復、復元、応急修理の委託を受け研究を継続している。
- 4) 吉本忍・太田淳「知られざるインド更紗」京都書院、1996、p76
- 5) 「世界大百科事典」27、平凡社、1988、p466
- 6) 「グラフィック茶道なごみ」淡交社、2013、p23、35
- 7) 防水浸水性とは水は通さないが、水蒸気は通す性能のことである。例えば、アウトドア用品、レインウエア、スポーツウエアに用いられるゴアテックスやシンパテックスなどを修復にも用いる。
- 8) タビスリー保存研究会プロジェクト実行委員会「タベストリーの保存研究―石橋財団所蔵『ヨセフ物語』―」中央公論美術出版、2008、p117

# Conservation of the Kyoritsu Women's University Museum collection, with a focus on *shiro momen-ji tachiki soka moyo sarasa* (white cotton chintz with a pattern of trees and plants): Report I

Tanaka Yoshie, Takahashi Yuko

[Abstract]

Cultural properties can be damaged over the years due to exhibition, improper storage conditions, or aging. The chintz referred to in this report had been folded and stored for a long time, due to limited storage space. As a result, deep creases had formed in the central vertical and horizontal folds, and fine wrinkles over the entire surface, of the chintz. These creases and wrinkles spoiled the beauty of the chintz at the time of exhibition. Moreover, if left as they were, they might cause tears, increasing the level of damage. In addition, the stitches on the hem of the chintz had frayed, resulting in an unstable condition. To solve these problems, we decided to repair the chintz. We humidified the creases and wrinkles to smooth the surface of the chintz. The frayed stitches were fastened with a thread of the same color and material. After the repair, the creases and wrinkles were mostly smoothed and the loose threads were fixed. As a result, the chintz regained its beauty, could be safely exhibited, and could withstand long-term storage while remaining in a stable condition.